資料No. 1

女性教職員だけの教育政策研究会
報告書

平成２７年４月

福井県教育委員会

目　次

○はじめに …… 1

○基本的な視点 …… 4

○施策の提案について

施策①　学校での学びと実生活が結びつく新たな授業の展開…… 5

施策②　学校・家庭・地域が一体となって子どもを育てる仕組みづくり … 6

施策③　親が親しみやすい「親学」入門ツールの開発…… 7

○研究会における主な意見…… 8

○研究会開催日程 ……16

○研究会会員名簿 ……17

～　はじめに　～

今年度、「福井県教育振興基本計画」の策定を契機として、福井の教育について多くの教職員等と様々な議論を行う中、ともすれば男性目線で議論を行うことが多い状況にあります。しかし、教育の現場である学校や家庭、地域などにおける女性や母親の存在は大きく、教育政策に女性の視点からの意見を反映させるため、教育委員会の女性教職員に研究会の立ち上げを呼びかけたところ、１３名の教職員の賛同を得て、会が発足しました。

研究会には、教育委員会のすべての課から女性教職員が参加し、日々の担当業務を超えて、福井の教育について幅広く議論を重ねてきました。

福井の子どもたちは、学校や家庭において、とても丁寧に育てられていると県内外の方々から評価いただいております。先生も非常に熱心で子どもたちにきちんと教え込み、また、社会全体においても教育熱心な歴史・風土があります。三世帯同居や近距離同居が多いこともあり、母親が少々仕事で帰るのが遅くなっても祖父母が宿題を見てくれるので、大丈夫であるという声もよく聞きます。

そして、子どもたち自身の頑張りも合わせ、福井の子どもたちは、学力・体力が全国トップレベルにあり、「教育県・福井」としての地位を確立し、全国のモデルとなっています。

しかし、福井の子どもたちは、親や大人から与えられたことは、一生懸命、真面目にこなすけれども、一方で、自ら考え、様々なことを体験し、やり抜こうとする自主性・積極性が足りないのではないかということも指摘されています。私たちの子どものことを考えても、宿題を終えるとすぐにゲームをし始め、積極的に何かをする姿をあまり見たことがありません。

家庭においても、親が過保護に手を出し過ぎることもあれば、本県は共働きが多いせいか、親が非常に忙しく、親の手を煩わせるような経験をさせないなど、子どもが伸びようとする自主性の芽を摘み取ってしまっていることが多く見受けられます。

最近の子どもたちは、手伝いをしないとよく耳にしますが、私たちの経験からすると、仕事を終えて急いで夕食を作らなければならないときに、子どもに手伝いをさせると、汚れたり遅くなったりするため、かえって面倒になることも多く、子どもに手伝いをさせなかったという反省があります。そして子どもが大きくなり、親元を離れる直前になって急に焦り出し、料理など必要最低限のことを教え込む親御さん方も多いのではないでしょうか。

しかし、親や教員が苦労させずに、大切に育てた子どもたちも、いずれは社会の一員として巣立っていかなければなりません。福井のていねいな教育のよさを活かしつつ、今後は、社会で生きていく力を身に付けさせ、自ら羽ばたかせるには、子どもの成長を見守り、「待つ」姿勢が必要です。

そして、学校での学びは、実生活に活かされ、将来に役立っていくものであるべきだと考えます。学校で学んだことは、すべてが将来に向けて「線」でつながっていくものであり、「点」と「点」で散在するものではありません。同時に、見通しを持って、何のために学ぶのかという動機づけや目的意識が必要です。

また、子どもの教育について議論する中、研究会では、親への教育について多くの意見が出され、子育てや教育に熱心であるがゆえに、不安や悩みを抱えているような親が多くいる一方で、子育てや教育に無関心な親がいることを痛感しました。例えば、月１回のお弁当を宅配業者に依頼するような親や、行事の持ち物の中に「水筒」とあると、中に飲み物を入れずに水筒だけ持ってくる親がいるとも聞きます。

私たちも、結婚する前に、赤ちゃんや子どもとほとんど接したことがないまま親になり、目の前の我が子の夜泣きが激しいことや、ミルクを飲まないこと、離乳食を食べないこと、寝返りをしないこと、お座りをしないこと、言葉を話さないこと等々、ここには書ききれないぐらい多くの悩みをどこにどう相談してよいか分からず、途方に暮れた時期もありました。

このような背景としては、子どもの頃から、将来、親や家族の一員になることへの心構えが形成されていないことも考えられます。これまでの教育の中では、「個」は重視されてきましたが、社会の一員としての自覚を持たせることも必要であり、学びの過程で将来へのビジョンを持たせる教育が重要です。また、子育てや子どもの教育に関する知識・情報が、親に不足していることも考えられ、今後は、ますます、親への働きかけや「親学」教育が必要となります。

子どもの教育は、学校や家庭の中でのみできるものではありません。近年、学校の外での学習活動も増えるなど、地域との関わりが重要となってきています。学校の役員会に出席したとき、地域の方々の中には、学校や家庭の手助けをしたいと思っている方々も多くおられると感じました。

今年、大雪が降った際、子どもたちが歩く場所がないだろうと、腰を曲げながら黙々と歩道の除雪をしてくださった老夫婦をお見かけし、保護者として申し訳なくなった覚えがあります。このような方々のお気持ちを大切にし、学校・家庭・地域が一体となって教育を支え、子どもを育むネットワークが求められます。

また、地域のつながりが希薄になっている中、そのような学校を中心としたネットワークに、若者、保護者、高齢者など幅広い層が参画することで、今後、社会教育の新たな枠組みを形成していく可能性もあるのではないかと考えます。私たちの子どもたちも、小さい頃は、地域の方々に大切にしていただきましたが、学校を卒業した後は、地域との関わりが極端に少なくなってしまいました。若い方にも、引き続き、地域との関わりを持ち、学校・地域を盛り上げる大きな力となってほしいと考えます。

最後に、人口減少問題が大きく論じられていますが、私たちの子どもたちも将来の岐路を選択する時期に来ています。子どもたちに、ゆくゆくは地元に残って福井を支える大人になってほしいと思うとともに、将来、どこで働き、どこに住もうとも、何らかの形で「ふるさと福井」に思いを寄せてほしいと切に願います。自分たちがそうでしたが、都会に憧れ、ふるさとを一度は離れてみたいという、子どもたちの言わば当たり前の気持ちを十分理解し、「ふるさと福井」について親自身が誇りを持って語れるよう、親の努力も必要です。

親も子どもと一緒に、地元の産業や歴史・伝統などについて学び、「ふるさと福井」を見直す必要があります。例えば、福井には、世界に通用するようなものづくり産業がたくさんあります。福井にいても世界と関わる仕事がたくさんあるということを、子どもに伝えたいと思います。

そのような観点から、福井の子どもたちへの教育は、「福井で活躍する人」「県外で活躍する人」「世界で活躍する人」という幅広い選択肢を子どもに持たせつつ、「ふるさと福井」に愛着・誇りを持ち、福井を様々な方向・形で支えていこうとする視点の形成が、早い段階から必要と考えます。

以上のようなことから、研究会では、次の基本的な視点から、教育施策を提案します。

基本的な視点

1. 体験の機会を多く設け、子どもたちが自ら考えやり遂げる教育

2. 学校で学んだことを、社会で生きていく力に確実につなげる教育

3. 将来、親となることや家族、社会の一員となるビジョンを持たせる教育

4. 学校、家庭、地域をつなぎ、一体となって子どもを育てる仕組みの創設

5. 子どもと真っ直ぐ向き合えるよう、親の悩みに寄り添う「親学」教育

施策① 学校での学びと実生活が結びつく新たな授業の展開

■課題

・体験的な学習や課題解決型の学習での学びの成果が、それぞれの教科で完結し、実生活に結びつきにくい。

・生活することと学びの結びつきについて、家庭生活の中で学びとる機会が少なくなっている。

■方向性

・体験教育の重視

・自発的な学びの場を設定

・学校での系統的な学習で得た知識や技術が、実生活に活かされるように、カリキュラムを構成し、授業を実施

■具体例な取組み

・子どもの興味関心が高い家庭科を柱に、カリキュラムをクロスさせ、算数・社会・理科・書写など他教科と関連付けた体験的な学習活動を取り入れる。

・学んだ知識や技術などが、学習や実際の生活において活用され、さらに児童が課題を見つけ、解決する力が身に付く学習の場を設定する。

＜５年生の例＞「伝統料理①　日本編　ご飯とみそ汁」

教科単元等
家庭科　「日常の食事と調理の基礎」　　社会科　私たちの生活と食糧生産
理　科　植物の発芽と成長　　算　数　概数、見積もり　割合
書　写

理科
・植物の発芽と成長（５年）
　＊でんぷん

書写
・紙面構成を考えて書こう
　＊手書き文字のよさを生かす　（５年）

家庭科　Ｂ　日常の食事と調理の基礎
(1)　食事の役割
　イ　楽しく食事をするために
　　・楽しい食事の工夫
(2)　栄養を考えた食事
　ア　体に必要な栄養素の種類と働き
　　・五大栄養素のはたらき
　イ　食品の栄養的な特徴と組み合わせ
　　・地域の農産物
(3)　調理の基礎
　ア　調理への関心と調理計画
　　・予算を立てた材料購入
　Ｉ　米飯及びみそ汁の調理
　　・米と水の分量
「オリジナルみそ汁をつくろう」
「ごはんとみそ汁をつくろう」
＜10～13時間配当＞

社会
・私たちの生活と食料生産（５年）

算数
・概数（およその数）（４年）
・見積もり
・割合（５年）

新たな課題
伝統料理②　外国編　外国の米料理

６年社会「世界の中の日本」
外国語活動「ランチメニューを作ろう」仕上がった料理について英語で説明。※ALT の活用
家庭科　「楽しい料理を工夫しよう」　理科　動物のからだのはたらき　等につながっていく。

施策② 学校・家庭・地域が一体となって子どもを育てる仕組みづくり

■課題

学校や保育所、幼稚園などで、子どもに様々な体験をさせるためなど、地域の幅広い人材の協力が必要だが、人材確保が困難。

＜特に学校等において必要とされる人材例＞

分野	内容
教育活動	（ふるさと）郷土史、史跡 （家庭）郷土料理、畑づくり、田植え、稲刈り・ミシン （芸術）合唱、太鼓 （運動）スキー指導、水泳指導 （その他）キャリア教育、補充学習支援、読み聞かせ
環境整備	敷地の草刈、樹木の剪定、図書室整理、学校畑管理、除雪
学校外活動	登下校見守り、校外学習引率、交通安全指導

＜問題点＞

・子どもが通う小学校の母親委員会で、子どもたちと畑づくりの体験活動をしようという話になったが、地域の方にお手伝いをお願いする際、どなたに声をかけてよいか分からず、スムーズにいかなかったというような声があった。

・核家族化の進展に伴い、地域のつながりが希薄化し、地域にいる人材が学校等から見えにくい。

・学校や子どもたちのために力になりたいと思っておられる方がいても、自らは名乗りにくい。

・学校等において人材が必要となる場合には、個人的なつながりの範囲で探すことになるため、参加していただく人材の幅が広がらず、子どもの状況や能力に応じた人材を選択できない。

■方向性

1. 子どもたちのために力になりたいと考えているにも関わらず、自分から名乗りを挙げない方々が、名乗りを挙げやすい仕組みをつくることが必要。
2. 個人的なつながりの範囲ではなく、地域の人材を確保する窓口を一元化し、学校からも地域・家庭からも人材の情報を得やすい仕組みが必要。

■具体的な取組み

各地域において人材バンクを創設し、 地域人材を活用しやすい仕組みを整える。

①<u>人材バンク運営主体（コーディネーター）</u>⇒公民館

②<u>人材発掘について</u>

・地域住民（高齢者・保護者・学生など）に、「人材バンク」への登録を呼びかけ。（回覧板を活用、地域内の大学や専門学校にも周知）

③<u>人材活用について</u>

・学校等にリストを配布。回覧板等で各家庭にも周知。（家庭のニーズにも対応）

・学校等からの要請に応じ、コーディネーターが連絡調整役となり、マッチング。

施策③　親が親しみやすい「親学」入門ツールの開発

■課題

①子育てに対して無関心な親への対応

・保育所、幼稚園などに子どものしつけなど親の役割・責任を委ねてしまう
（月１回のお弁当の日に、宅配業者に依頼する親がいると聞く）

・テレビやゲームを子どもに与え、親子でのコミュニケーションが不足がち

・家庭教育講座を開催しても、興味のない親は参加しない

②子育てに不安や悩みを抱えている親への対応

・母親が悩みや不安を抱え込み、相談できる人がいない
（母親は２４時間子育てしているが、父親の子育て参加は進まず、相談もできない）

■方向性

①子育てに興味・関心のない親（パパ・ママ）を子育てに引き込む

②子育ての不安・悩みを解消する

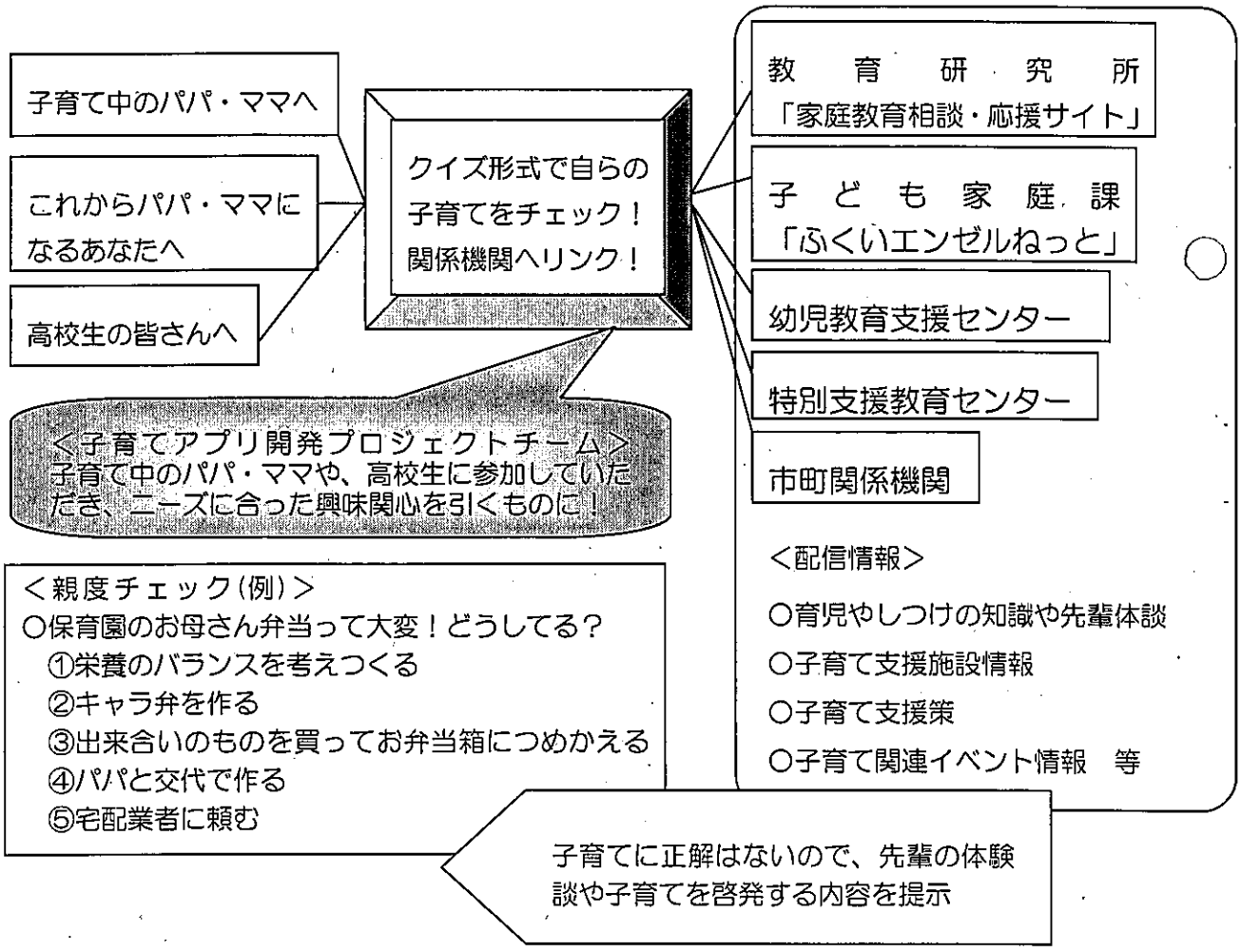
③親になる前の段階（高校生）から、子育てに対する意識を高める

■具体的な取組み

子育てアプリ（サプリ）の配信

若い世代を中心に急速に普及が進むスマートフォンを活用し、それらを介した子育てアプリを開発することにより、親（パパ・ママ）自身の子育てをチェックしたり、子育てに対する知識を提供し、子育てに対する興味関心を高め、親力向上を図る。

（例）母子手帳配布とともに配信　高校生には入学時に紹介



研究会における主な意見

＜幼児教育・家庭教育＞

・行事の持ち物の中に「水筒」とあると、中に飲み物を入れずに水筒だけ持ってくる母親がいると聞いた。子どもの教育以前に、若い母親の教育、家庭教育を行う必要があると感じる。

・運動会にピザや寿司の宅配を頼む親がいるが、お弁当の文化は大事。また、食事はファーストフードで済ますというような家庭もある。

・自分は働いていて保育園に迎えにも行けなかったため、子どもはさびしい思いをしているかもしれないと思い、せめてお弁当づくりは頑張った。

・土曜日に保育所に子どもを預けて遊びに行ってしまう親や、月１回のお弁当を宅配業者に依頼するような親がいる。自分はスマホをいじり、子どもにはゲームを与え、親子の触れ合いやコミュニケーションがほとんどない。

・どんなに魅力的な家庭教育講座を開催しても、問題があるような親は出てこない。

・親を変えることはできないが、親をほめることによって変わってくるものはある。

・由紀さおりさんの「童謡で伝える会」でも親をほめると、親は必ず号泣する。母親はみんな頑張っている。

・父親の子育て参加が、依然として進まない。父親の子育て参加は、イベント時だけで済むが、母親は、24 時間、子育てしなければならない。子育ては手伝いではなく、日常になる必要がある。

・父親が子育てに参加するためには、母親がほめても効果がない。職場での評価が必要。

・自分の家庭では、月１回のお弁当を主人と交代でつくる。主人は、小さいころから母親に「将来、奥さんの手伝いをするように」と育てられ、子どもの頃からよく手伝いもしていたようだ。男性が大きくなっていきなり手伝いをしろと言われても難しいので、子どもの頃からの教育が必要。

・子どもは、遊びや体験の中で学ぶことが一番大切である。いろいろな学びに気付くことや発見するような力が、自分が将来何になりたいかなどの出口を見つける基礎となる。

・子どもたちがいろいろなことを体験することが少ない。家庭でも、ついゲームで遊ばせておくなどしてしまうため、意識して子どもたちに体験させる必要がある。

・保育園や幼稚園でいろいろな遊びを通して学んでいくようなことは進めていても、やはり家庭教育も重要である。親の家庭教育力をどのように伸ばしていくかが重要。

・子どもを通して親も変わることがある。親への教育も根気よく取り組む必要がある。

・少子化や核家族化が進み、人とのつながりが希薄になってきている。人とのつながりがない子どもは、就職をしてからも苦労する。子どもたちに様々な人とのつながりを持たせ、社会性を身につけることが必要。

・幼児教育は、公立、私立、保育所、幼稚園、認定こども園など多数の形態があり、連携が難しいのではないか。県民から見ても、分かりにくいように思う。
・「遊ぶ」ことが教育そのものであり、保育所も幼稚園も同じではないか。最近の保育士は幼稚園教諭の免許も持っている方が多い。
・保育士が若いうちに退職してしまうのは、給料が安く、休みが取れないからと聞く。待遇の改善が必要では。
・今の子どもたちも、いずれは親になる。家庭教育の中でなかなかできないことを、学校や地域で体験させ、１０年後、２０年後に今よりはいい方向で育てるという長期スパンで考えることが必要。あわせて、若い親に働きかけることも必要。
・自分は、これから親になるが、子育てに関する知識がない。「家庭教育相談・応援サイト」のようなものを積極的に周知してほしい。また、「親学」を、子どもが生まれる前から進める必要がある。

＜学校教育＞
・福井の子どもは非常に忙しい。放課後子どもクラブは、家庭に代わる場所であり、心が癒される場所であってほしいと思う。地域には、協力してくださる人が多くいると聞き、クラブ間の情報交換が活発化するとよい。
・子どもたちが自ら考える力は、進路を決めるときや結婚や子どもについて考えるときなどに非常に重要。
・子どもたちは、大人が思うよりももっといろいろなことを学びたい、チャレンジしたいと思っている。
・塾の行き帰りに、コンビニを利用する子どもがとても多い。
・朝ごはんも家族それぞれが時間のあるときに食べる。スーパーにはお惣菜もたくさん売っているので、たとえ食事をつくれても、便利なため、夜も出来合いのもので済ませてしまう。そのような環境にいる子どもたちが、将来、料理をつくることは難しい。
・卵が割れない子どもがいたりするが、食については、家庭の中で体験してできるようになってほしい。
・家庭科の時間に、生活することのすべてに理由があることを子どもたちに考えさせると子どもたちは、いろいろなことを調べながら、理屈でわかっていく。
・教科の中では家庭科が一番好きだという子どもたちが多くいる。学校で学んだことを実生活に活かせるのは、家庭科である。家庭科はとても大事で、小学校だけでなく中学、高校とつなげていく必要がある。
・将来、役に立つという意味では、家庭科が一番なのではないか。数学で二次方程式や因数分解を学んでも、仕事で使うかと言えば疑問である。学びの中に、将来役に立つことがあることを伝えられると、もっと授業がわかりやすくなる。
・学校で学んだことは、すべてが将来に向けて「線」でつながっていくものである。

・算数の時間に分量を書いたレシピを用意して、何人分つくるには、どれだけ材料を用意しなければならないか考え、食べるときには、何等分するということを体験しながら学んだ方がおもしろく、実生活に活かせる。
・このようなことが、まさに「アクティブ・ラーニング」である。そのような授業は、子どもが生き生きとするだろうし、将来、忘れないだろう。
・小学校でやれたとしても、中学校、高校で連携が切れてしまうのではないか。
・今の日本の現状では、中学校、高校では、教科担任制でみっちり時間割が組まれており、なかなか難しいかもしれないが、接続を考えていくことは大事。
・料理、裁縫など家庭科で習ったことは、貴重である。結婚やライフスタイルなども家庭科の授業に入ってくる。赤ちゃんを抱っこして触れ合うようなことも家庭科。家庭科も学力調査に入れたほうがよいのではないかと思う。生きていく力のベースになり得る。
・子どもたちの伸びしろを残しておくことが大切。子どもがどこまで自力でやれるかを見守り、待つことが必要。やさしくすることで伸びる芽をつんでしまうことは避けたい。
・子どもが小さい頃は、必ず親にくっついてくる。包丁を持って切りたがるなど、何でも親と一緒にやりたがる。子どもには、元々、学ぼうとする能力があるが、それがいつしかなくなる。
・便利な社会になったことと、親が忙しくなったため、子どもに何もさせないようになってきている。家庭では、「遅い」「汚い」「危ない」などの理由から、手伝いをさせない。
・親が「待つ」ことが一番大事。大人が答えを言わず、ずっと待っていると、子どもは必ず答えを生み出す。学校教育では、時間がないせいか、「待つ」ことをせず、次から次へと導く。
・「待つ」ことは、実際にはなかなか難しい。家に帰ると、すぐにご飯を食べさせてお風呂に入れてと考えると、子どもが包丁を握るのを見ていることは難しい。
・地域においても実践を行うといいのだが、親は非常に忙しく、土日にそのような講座に参加しようという気持ちが起きない。親は、子どもと向き合う余裕がなく、とにかく何でも早く片づけようとする。
・気がかりな子については、幼児期の早い段階から支援が必要だと思うが、保護者の理解が得られない。子どもの気がかりな部分について話しても、「自分も小さい頃そうだった」「うちの子は普通」などと取り合ってもらえない場合がある。
・子どもの状況について、よく理解している親もいる。しかし、「このままにしておいてほしい」と言われる。
・就労の段階になるとうまくいかなくなることも多く、なるべく早い幼児教育段階からのケアが肝要。
・園長ぐらいになると、うまく親をとりなすことができるが、若い保育士などでは難しいため、研修等の充実が必要。

＜学校・家庭・地域との連携＞

・教員が多忙化していることも要因だが、学校が家庭と地域の仲介役になっていない。

・地域には学校や家庭を支援したいと思っている方がたくさんいる。例えば、子育てサポーターの研修講座を開くと、多数の方に熱心に受講していただける。ただ、熱心な方々のことが学校には見えてこなかったり、公民館に情報が伝わらなかったりするので、そのようなところを繋げることができればよいのではないか。

・何かをやろうというとき、学校が地域の方に１対１でお願いしなければならないのが実情である。地域の人材を学校につなげるコーディネーターが求められる。

・地域の人材は、市町でサポーターとして登録され、行政の職員と顔合わせはするが、なかなかうまくいかないようである。公民館や学校とのチャンネルがあった方がいいのではないか。

・地域の人材の中には、子育てマイスターのように資格がある方もいれば、資格はないが何かしたいという気持ちがある方もいるので、様々な接続を考える必要がある。

＜ふるさと教育・キャリア教育＞

・人口減少が大きな問題になっており、大学進学者の半数が県外に進学し、Ｕターン率も低く福井に戻ってこない状況である。福井の人口減少をどう食い止め、福井をどう発展させていくかということが今後の大きな課題であり、そのような視点から福井の教育について考える必要がある。

・自分の周りにも、県外の立派な大学に進学して福井に帰ってこないよりも、福井やせめて近県の大学に進学して、福井で就職してほしいと考えている母親友達が多い。

・親としては、子どもの希望をかなえてやりたいという思いが強く、まさにそのために働いているようなものだ。子どもに、福井に帰ってくるよう強く言うことはしないが、本音としては、帰ってきてほしいと思っている。

・自分の妹は、二人の子どもたちが小さな頃から、福井にいるようにと強く言って育てた結果、子どもたちは福井に残った。自分は、できるだけ子どもの希望どおりにしてやりたいと考え、特に何も言わずに育てたら、二人とも県外の大学に行ってしまった。やはり、子どもに対する母親の影響は大きい。

・自分は、いったん県外に出て帰ってきた。幼い頃から周囲に「あなたはこの家を継ぐ人なのだから帰ってこなければいけない」と言われて育ってきて、それをずっと心のどこかで気にしていた。

・グローバルと言われる中、福井県ゆかりの県外の著名な方の話を聞くとともに、子どもたちに身近なところで働く人々に話をしていただいてはどうか。

・学校では、子どもたちに将来を考えさせる際、「福井で活躍する人」「県外で活躍する人」「世界で活躍する人」という選択肢を子どもたちに持たせたうえで、福井で活躍できる人材を育てようとしている。幅広い選択肢を与えながら、子どもたち自身に意思決定させていく指導をしていくべきだと思う。

・将来、福井に帰ってくる子どもを育てることを考える場合、目先のことではなく、地道でもっと深いところを考えなければ、そんなに簡単には変わっていかない。
・小学生は、まずは地域の良さを知り、愛着を持たなければならない。地域の人材を活用した授業や地域をフィールドとした授業などの取組みをコンスタントに行うことで、自分の町や学校に誇りを持つようになるのではないか。
・地域の産業や農産物、郷土料理、郷土芸能、文化遺産、歴史を学ぶなかで、子どもたちに今後、何が求められるかを考えさせる機会を持つ必要がある。
・みんな福井のことが好きだと思う。しかし、福井の詳しい事情や企業などを知らない人が、親を含めて多い。
・働く場があるのかどうかということも問題。また、子どもより親の問題が大きいのかもしれない。
・福井には素晴らしい企業がとてもたくさんあり、世界トップレベルの製造業も多い。そのようなことを、子どもにも大人にももっと発信すべきだと思う。
・女性の感覚に訴える、いいものが福井にはたくさんある。そういうものを子どもたちに伝えて、福井にいても世界と関わる仕事がたくさんあるのだということを知ってもらいたい。男性目線ではなく、女性の目線で魅力的だと感じるものを伝えてはどうか。
・福井県は子どもを育てやすいと、出ていく子どもたちや出ていった子どもたちにも伝わってほしいと思う。
・ふるさと教育は、古いものと新しいもの、二方向に行うとよいのではないか。新しいものを作り出せるところに自分は生まれてきたのだということを学んでもらい、将来そういうものと関わることのできる仕事に就けるという選択肢を知ってほしい。
・ふるさと教育を、例えば「ふくい学」というような授業科目として行うことは考えられないのか。
・県外に行って自分でいろいろなことを経験してきたから、料理でも洗濯でも何でもできるようになった。外で生活してみたことが力になっている。外の世界を見たうえで福井に戻ってきてほしい。その方がたくましくなる。もっと放っておく、鍛える教育が必要。過保護に学力高く育てていくのは、本来ではない。
・子どもを過保護に育てるということは、自分にも覚えがある。毎日子どもを高校に車で送っていくことは、これまで何人かの方に叱られた。

＜食育・給食＞
・幼児期に経験してきた食品数が少なすぎる。食べたこともなければ、触ったこともない食品が多い。偏った食生活のまま幼児期を過ごし、小学校の給食で初めて食べる食品が多いため、アレルギーが出ることもある。
・連れていくと面倒なためか、親は子どもとスーパーに買い物にも行かない。魚は、切り身のままで泳いでいると思っている子どもが実際にいる。

・料理教室では、野菜をうまく切れることが重要ではなく、「切れた」という気持ちが重要
・献立を考える際、バランスなどを全く考えない親も多い。お菓子をご飯代わりに食べ、お茶の代わりにコーラを飲む家庭もあると聞く。
・昔と違い、食育を家庭だけで進めることは難しい。学校が、体験させることのきっかけづくりをするとスムーズになる。
・自分の住む町では、月１回、手作り弁当の日があり、子どもたちも楽しみにしていたものだが、数年前に手作り弁当の日がなくなった。給食では箸も敷物も持参しなくてもよくなり、親が少しだけ頑張れるようなチャンスがなくなった。親ができる部分を残しておくことが重要ではないか。
・給食には、共通のものを食べることや栄養指導を行うなど利点がある。家庭では、どんなに万遍なく食品を揃えても食事が偏る。子どもが部活動で持参するお弁当を見ると、かなり偏っている。給食は品目数も多く、いろいろな味を経験するという意味では、非常に重要。
・節分には豆を食べるなど、給食は、季節感を取り入れている。また、地場産の食材を積極的に使っている。
・家庭環境が複雑で、朝も夜も、一人でご飯を食べる子どもも多くいる。給食では、友達と仲良くご飯を食べることができるという安心感がある。
・一人っ子も多く、皆で分けて食べるということを知らない。飲み物ですら、分けて飲むことを知らない子どももいる。そのようなことも、給食を通して学ぶ。

＜社会教育＞
・「社会教育」という言葉の範囲はとても広く把握しづらい。個人の趣味・興味が多様化しており、社会教育団体は、昔の形態とは異なっている。
・婦人会などのような社会教育団体に所属することで、その地域とつながる、関わりをもつという意義があると思う。地域と関わりを持つことで、近所の人々のことを知り、トラブルを減らしたり、助け合ったりすることができる。
・昔はお葬式の時などに近所の女性達が台所の手伝いに来てくれたものだが、今は外で葬儀を営むことが多く、相互扶助の機会も減ってきている。
・都会ではさらに顕著だが、独身者が増加しており、結婚していても子どもを持たない方もいる。子どもがいないと子ども会に入らず、また、婦人会の活動にも興味を持ちづらく、なかなか地域と関わる機会がないのではないか。
・皆が結婚して子どもを持つのが当たり前という時代が変わり、団体のあり方も変わってきている。
・マンパワーとして重要な２０～４０代の方々が、地域との接点を持てなくなっている。この世代の人たちが興味を持てるような社会教育を進めていってはどうかと思う。

・小学生の頃は子ども会があるが、中学生になるとなくなり、学校の役員もたまにしか回ってこなくなる。高校生になるとさらに関わりがなくなり、地域で何が起こっているかも分からなくなってしまう。
・社会教育は、地域によって差が大きい部分もあり、リードする人が必要ではないか。
・地域とのつながりがしっかりしているところは、災害が起こった際も協力し合って被害を軽減できたという話もある。災害のためだけというわけではないが、地域との関わりも重要である。
・地域での公民館の役割は重要だと思うが、自分は公民館にはほとんど行かない。様々な講座・企画があるのだが、他の参加者との年齢的なギャップもあり、なかなか足が向かない。また、平日の日中の時間帯が多く、働いている人は行けない。
・福井駅の近くに新しい公民館ができたが、きれいで駐車場があり、忙しい女性でも行きたくなる雰囲気がある。見た目への投資も無駄ではなく、ゆとり感覚のある「場」を作ることで、そこで社会教育や様々な活動を行いたくなるようにできると思う。

＜女性の働き方等＞
・海外で女性が職業に就いていないと、周りの人に「なぜ仕事をしないのか。もっと自分を実現する仕事をするべき」と言われるそうである。女性も自分を自己実現していかなければならないという社会的圧力が海外にはあるのではないか。
・福井は共稼ぎが多いため、結婚して仕事をしないで家にいると、周りに責められる風潮がある。
・福井県の女性は、働きながら家事も効率的にこなし、自分も趣味を持って生きている自立した女性が多いと感じている。そのような福井の女性のよさをもっと活かしていくとよいと思う。
・男性、女性について、こうあるべきと決めてしまうのはよくないが、性差は必ずある。そのあたりを教育でどう考えていくか。
・自分の世代は、ワークライフバランスが悪い。働く女性が多い県であるが、家庭教育の重要な時期に何か欠けるのではないかと思う。この研究会のような機会はなかなかなく、女性同士のコミュニケーションの場もない。生涯学習の場にも参加したいと思うが、なかなか時間が取れない。
・福井だけではないかもしれないが、管理職になる年代の女性には、子育てだけでなく介護の問題もあり、男性よりも一歩踏み出せない実情がある。
・目指す女性管理職がいないのではないかと思う。疲弊してぼろぼろになる姿ではなく、自分の意見を活かしながら活き活き仕事をする女性管理職のモデルがあるとよいのではないか。
・管理職の仕事は男社会だなと感じることがある。女性管理職の中にも素晴らしい方はいるし、ぜひこの方に管理職になってほしいと思う女性もいるが、そういう方に限って管理職にはならない。

・一部だけ女性の管理職を増やしても、男社会は変わらないのではないか。女性登用は始まったばかりで、まだまだ時間がかかると思う。
・性別が違うのだから、男性管理職と女性管理職が同じスタイルで仕事をするのは無理である。男性も女性も、お互い発想を切り替えて、女性ならではの視点を活かすことができるようにしていくとよいと思う。
・社会の様々な組織で女性の管理職が増えれば、女性の働き方や女性管理職への見方なども、これから変わってくると思う。

＜福井の県民性＞
・県外の教員に話を聞くと、福井は、どの先生もきちんとしていて、教室もとてもきれいである。突出するより、決められたことをきちんとすることが根底にある。
・福井の人は、他人より目立ったり、抜きん出たりすることがあまりよしとされないのではないか。
・福井県民は、しなくてはいけないが皆があまりやりたがらないようなことを、子どもも大人もきちんとこつこつやっていると感じる。
・学力・体力日本一など、福井の教育には自慢できることがたくさんある。もっと積極的に発信してもよいと思う。謙遜も大事だが、福井のいいところを積極的に発信していくことも大切。
・福井県は、県、PTA、校長会や様々な団体が対立しておらず、非常に風通しがよい。他県にはない、福井県の恵まれている点であると思う。
・福井の教員の自己評価は非常に低い傾向にある。一生懸命やっていても自信が持てず、低めに評価する。ほめられる機会があまりなく、できて当たり前という空気がある。
・子どもたちがお互いをほめ合っていると、子ども同士の人間関係がとてもよくなり、空気が変わる。子どもも大人も「ほめる」ことは、とても大切。

研究会　開催日程

	日　程	内　容
第１回	１月１６日（金）	「福井の教育」について意見交換
第２回	１月２３日（金）	幼児教育・家庭教育について
第３回	１月２９日（木）	学校教育について
第４回	２月　４日（水）	教育長、企画幹との意見交換
第５回	２月１３日（金）	社会教育について 西野教育委員との意見交換
―	２月１７日（火）	教育委員会へ報告
第６回	２月２７日（金）	中間取りまとめ
第７回	３月　６日（金）	学校での学びに関する施策案について①
第８回	３月１２日（木）	学校、家庭、地域をつなぐ施策案について①
第９回	３月１６日（月）	親への教育に関する施策案について①
第１０回	３月１９日（木）	学校での学びに関する施策案について②
第１１回	３月２０日（金）	学校、家庭、地域をつなぐ施策案について②
第１２回	３月２３日（月）	親への教育に関する施策案について②
第１３回	３月２６日（木）	取りまとめ
第１４回	３月２７日（金）	取りまとめ
第１５回	４月　７日（火）	報告
―	４月　８日（水）	教育委員会へ報告

女性教職員だけの教育政策研究会　会員名簿

○グループリーダー

グループ	課　　名	職　　名	氏　　名
代　表	教育振興課	総括主任	村崎　明子
幼児教育・家庭教育	○義務教育課	主　　任	廣部　真寿美
	高校教育課	指導主事	石田　由紀子
	スポーツ保健課	企画主査	五十嵐　めぐみ
	生涯学習・文化財課	主　　査	窪田　裕美
学校教育	○高校教育課	主　　任	山田　仁美
	学校教育政策課	主　　任	水上　直子
	義務教育課	主　　任	角　智子
	生涯学習・文化財課	指導主事	岡崎　良子
社会教育	○生涯学習・文化財課	主　　任	浅野　尚美
	義務教育課	指導主事	吉田　千春
	学校教育政策課	主　　査	笠松　絵梨
	教育振興課	主　　事	竹内　和希

１３名